

<鈴木和雄氏追悼>泥の華

著者	植原 博馨
雑誌名	日本文学誌要
巻	46
ページ	114-115
発行年	1992-12-15
URL	http://hdl.handle.net/10114/00019661

泥の華

植 原 博 馨

最近、国文学会委員会に鈴木編集長のお姿が見えないと思つていたら、突然の訃報であつた。先ころ入院された時は、ベッドにワープロを据えて、毎日打つてゐるという元気印のご病人だつたと聞いていた。ジャコメッティの彫像のような瘦身は、米寿近いご高齢にもかゝらず芯強く、またすぐに元気なお顔を見せて下さると信じていたのに、不意に、風のように、私たちの前から立ち去られた。

生も死も霧流れゆく霧の中

鈴木さんの句である。送つていただいた幾冊かの句集があるが、一九三八年の第二句集『泥の華』は、泥中に一輪の花を咲かせる作品をと意欲した、ご自身満足な集であつた。その後は有季定型にしばらく、自在に想とことばを開く「短詩型」を求めてしだいに意欲的になられた。その発展として『化楽天』『超音波』などをまとめられた。『化楽天』はワープロ打ちの、ほんとうの手作り作品で、器用にこういうことが好きだつ

た。二集とも、「句集」ではなく「短詩集」と銘じたところに作者の力点を見る。それぞれ、第一章「泥の楽」第一章「泥の巻」という章立てにも「泥」にこだわる心がのぞかれる。私は俳句にうとく、難解な句境を読みとることができないのだけれど、抽象画を見るような、そしてたくさん動物たちが出てくる作者独特の世界を感じるのである。「くちなわも蝸牛も自分なのです」とおっしゃったことがある。長い作句は、自画像を描きつづけた歩みであつたのかもしれない。

鈴木さんの俳歴などは存じないが、若い時から作句をはじめ、新興俳句の系列に属していた。「昭和十六年の俳句事件のため句作は中断した」と『超音波』のあとがきにある。そのあたりの興味深い時代のお話などを、ゆっくりお聞きしておけばよかったと悔まれる。

『超音波』をまとめられる少し前、私に突然たくさん作品が送られて来た。感想を聞かせてほしいとのこと。私は困りは

てたけれどもかたがない、的外れのことを書いてお送りしたと思う。今、この一文を書くために『超音波』を開くと、一ひらの紙片がはさまれていた。「御撰句ありがとうございます。仲々の鑑賞眼にて、恐れ入りました。改めて整理し、おとどけしました。ご笑覧の程を 鈴木」と書かれている。私は見落としていたのか、忘れていたのか、はじめて読む感じなので、天国の鈴木さんから便りが来たのかと思ってしまう。俳句がわからない私への励ましなのである。人生の先達は、このように若輩に教えられるのだった。

国文学会機関誌「誌要」「そとぼり」への、編集長としてのご努力と愛着は、なみなみならぬものがあつた。それは編集後記などにも現われていた。今、このことを書くゆとりがなくなつたけれど、会の活動発展を誰よりも希つていられたにちがいない。

この前の総会の折に、私は鈴木さんから一枚の短冊をいただいた。そこには墨いろ太く『泥の華』冒頭の一句があつた。

独房に窓があるから春がくる 和雄

(うえはら ひろか・一九五一年卒)

一九九二年度 国文学会役員名簿

(会長) ○杉本圭三郎

(評議員) 外間 守善 西田 勝 ○佐川 誠義

松田 修 ○堀江 拓充 ○安藤 信広

表 章 ○西野 春雄 ○天野紀代子

○勝又 浩 ○伊藤 敬一 伊藤麻古斗

(委員) ○安島 史雄 ○植原 博馨 宇佐美雅英 大越 嘉七

岩崎 武夫 ○大和田 茂 小田切秀雄 香川 良成

大野 豊彦 金川 正治 ○川崎三四子 ○岸 礼子

片桐 登 木田由里子 小林 裕子 ○島本 昌一

岸本 一行 神 彰 須貝 千里 ○鈴木 斌

志村 直子 高梨多恵子 滝瀬 爵克 ○田中 益三

○鈴木志知郎 ○谷口 卓久 中村 青史 ○西尾 雅裕

田中 優子 長谷川 啓 服部 一希 ○濱田 弘美

○西村 裕一 ○星 ミュキ ○保坂 正 ○堀江 泰詔

○藤村 耕治 ○正木 信一 ○山田 稔 横手 一彦

○前田 角藏 ○福島真由美 ○藤原 春子 ○田中 單之

○横道 蘭 ○荻原 一雄 (○印は常任理事)

○成清 良孝 浅野 宣子 岡田 朋子 佐藤 啓太

(連絡部学生) 菅谷 智子 松嶋 孝典

白井 紀子